

書評

[評者]
青木 眞
サクラ精機株式会社学術顧問



優れた研修病院には、それぞれが置かれた地域や患者層にマッチした独自の診療文化・スタイルともいべきものがあり、これが国際標準化機構 (International Organization for Standardization: ISO) などでは評価できない形でその施設の診療の質を大いに高めている。

そしてこれらの施設には、長年、培われた有形・無形の診療上の知恵が集約され、それを何とか霧散させず次世代に語り継ぎたいという熱意による診療マニュアルが必ず存在する。古典的なものとしてはワシントン大学のワシントンマニュアル、聖路加国際病院の内科レジデントマニュアルなどが挙げられ、“母校”沖縄県立中部病院にも同様のものがある。最近勃興が著しい新しい研修病院にも、歴代、屋根瓦方式で養われた研修医・レジデントたちにより練り上げられた秘伝のマニュアルがあり、その形は A4 の紙に印刷されたものをホッチキスで留めただけのものから、院内ネット上のフォルダにまとめられたパワーポイント形式のものまで、いろいろであるが、若々しい診療上の熱意と良心が結晶化している。ここには「良き医師として患者を助きたい・役に立ちたい」という強烈なベクトルが充溢しており、同時に、その施設がいかに粗野な野戦病院であっても言語化できない「温もり」「優しさ」がにじんでいる。「自分の体調・気分・能力に左右されずに良質な診療を毎日提供したい」という臨床医であれば誰もが自然に持つ本質的な願いによる産物である。

さて前置きが長くなったが、ここで『ザ・亀マニユ』(正式名『総合診療・感染症科マニュアル』)の登場である。監修はいつもお世話になっている八重樫牧人先生と岩田健太郎先生。そして編集はなんと亀田総合病院である。タイトルからして以前から「感染症教育は

総合診療・感染症科マニュアル

八重樫牧人、岩田健太郎 監修
亀田総合病院 編

三五変型判 頁 464 2011 年
定価 2,625 円(本体 2,500 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00661-3] 医学書院刊

優れた総合診療教育の一環としてのみ可能」という監修者らの主張が具現化したものともいえるが、本書の特徴を「感染症を総合診療に組み込んだマニュアル」と表現しては的外れとなる。それほど、本書は極めて小柄でありながら大きな構造物を内在させている。まずマニュアルが陥りやすい近視眼的な料理本 (cook-book) で終わっていない。日常臨床で必須となる多くの「原則」が本書前半のかかなりの部分を占めており、その原則を医師はその経験の多寡を問わず生涯忘れてはならない。その意味では本書はマニュアルではなく手のひらにのる成書である。

感動するたびに書評用に付けた付箋が数十枚となったが、残念ながら紙幅の関係で「女性の健康」といったヘルスマネジメントから EBM まで視野に収めた本書をすべて紹介することはかなわない。極めて優れた点のほんの一部を紹介する。

- ・検査判断の原則：検査結果で診療行為がどのように変わるかを考えよう。
- ・一般外来診療の原則：患者は医師に直接クレームを付けることは少ない。苦情の投書に目を通し、コメディカルに寄せられる患者の言葉に敏感になるようにする。
- ・在宅診療の原則：終末期に起きる変化は“本人は苦しくない”ということをご家族に説明し、家族の不安をできるだけ取る。

本書は、小さな宝石箱のようなマニュアルである。このマニュアルを読んで心が温かくなならない医師は、役職が院長でも教授でも医師を辞めたほうがよい。研修委員長は「大人買い」の予算を準備されるようお勧めする。